きゝはやう出て、蘭奢よりうすくして、ゆうなるかほり有、火するゑ同前、

三芳野　伽羅

らんじやよりすこしはやく出、にほひはなやかにすゞしうかうばしき也、火末同前、

法華　伽羅

きゝふるうやはらかに、心たへにして言葉のべがたし、是も火するゑ同前、

紅塵　伽羅

きゝすこしをそく出て、いさゝかからき心あり、火するゑ同前、

古木　羅國

きゝふるめきひやゝかにすゞしきなり、あやめよりは、火ずるうすし、

中川　眞南蠻

きゝふるうにほやかにして、かろき火するゑなり、一説には木所伽羅といふ、

八橋　羅國

きゝ去づかにすゞしうして、古來よりはなやかなり、火するゑ菖蒲ににたり、

花橋　眞南蠻

きゝはやう出、かろくにほやかにして、やがてきゆるなり、是香のしるしなり、

以上十種〇追加二十二種略

〔御家流改正香道秘集〕二種之名香之事

一昔ゟ蘭奢待、太子、此二種を名香六拾一種之内第一として、古今無上妙品最上之香とせり、蘭奢待は稀にして、得がたきを以奇寶とするのみならず、其香殊更勝れて妙有、十度も燒かへすべきの説、古來ゟ傳ふる説也、本は東大寺の什物なる故、其名をまた東大寺とも云り、世に眞銘之物古